

藤村童話と『フランクリン自伝』

富田 和子

はじめに

藤村の童話四作（注1）より一二〇年以上も前に書き継がれた、経済的独立と社会的地位の獲得というアメリカン・ドリームの達成者であり、敬意を込めて〈代表的アメリカ人〉と呼ばれる（注2）ベンジャミン・フランクリン（一七〇六年―一七九〇年）が、息子に宛てた手紙の形式で、子孫の者のために生涯を語ったという『フランクリン自伝』（Benjamin Franklin, *Franklin Autobiography*, 1818）（注3）は、欧米だけでなく、日本の明治時代の青年たちにも立身出世のための指南書として盛んに読まれ、その合理的な物の考え方が、福沢諭吉（一八四三年―一九〇一年）の『福翁自伝』（明治31（一八九八）年―明治32（一八九九）年「時事新報」に連載。）と類似する点を見出される。（注4）

また、明治二〇年代半ばから三〇年代にかけてのロマン主義の風潮の中、藤村は明治26年創刊の「文学界」の活動に関わり、23歳（数え年。以下、同じ。明治27（一八九四）年）の時、『フランクリン自伝』と比べられるルソー

(Jean-Jacques Rousseau 一七二二年―一七七八年) の『告白録』(*Les confessions*) に深く感化され(注4)、このルソーの影響は、その後の『家』(明治43(一九一〇)年)や『新生』(大正7(一九一八)年)等の自伝的作品にみられる自我の主張や告白のスタイルに指摘されるのは周知のことである。

また、〈自学・独立独行・誠実・節儉〉などの諸徳が強調され、明治天皇へのご進講のテキスト、小学校の修身教科書に用いられ、立身出世のための徳目の書となったスマイルズ(*Samuel Smiles* 一八一二年―一九〇四年)の『Self Help』(自助論 一八五九年)の翻訳書である『西国立志編』(中村正直訳 明治3(一八一〇)年)4(一八一一年)と同様に、フランクリンが、一七三一年、26歳(注5)の時に樹立した十三の徳目〈節制・沈黙・規律・決断・節約・勤勉・誠実・正義・中庸・清潔・平静・純潔・謙讓〉は、皇室の家庭教師であった儒者の元田永孚によって、明治8(一八七五)年、明治時代の保守的・伝統的日本の宮廷に、皇后(照憲皇太后)に紹介された。そして、深く感銘を受けられた皇后はその内の十二の徳目を「弗蘭克林の十二の徳の歌」という題名の和歌に詠まれ、翌9年には女子師範学校で採用され、その後「金剛石の歌」となって、広まってゆき、明治20年に華族女学校に贈られ、校歌となったほどである。(注6)

そこで、藤村とフランクリンを単純に比較することはあまりにも違いすぎるが、藤村の童話四作と『フランクリン自伝』は、息子たちに語りかけるスタイルが共通し、それらをパブリックコミュニケーション研究の一つの問題点(注7)である、メッセージの送り手の特徴を意識することを通して比較すると、意外にも、いくつかの類似点を見出すことができる。

ところで、ここで取り入れるパブリックコミュニケーション研究の一つの問題とは、メディアの発達によって拡大した学問的探求の必要性があると考えられるメッセージの種類の内、社会的影響力を及ぼす有効な手段として存在す

る説得を主な目的としたスピーチとして確認することのできるメッセージの種類に関して、メッセージの送り手と受け手の特徴とメッセージの内容を検討しようとする見方である。

特に、メッセージとは、意識的に選択された言語と非言語のキュー（合図）から成っているため、メッセージの送り手の特徴は、その人が心の中で経験していることを記号で表そうとする際に大きな影響を及ぼす。また、それはメッセージに対する受容性に影響を及ぼすため、その中でも、その信頼性の問題は、最も関心を集める。

ところで、信頼性とは、一般的に、メッセージの送り手がその受け手に尊敬されていることを意味している。メッセージの送り手に能力があり、信頼に値し、好ましく見られているとき、その人には信頼性があるといえる。そして、メッセージを伝える前の段階で信頼性があまりない、あるいは全然ない場合、伝達する過程で信頼性を増す可能性はほとんどない。

このメッセージの送り手の信頼性に見られる問題とは、まず、メッセージの送り手が信頼性を得るために持っている要素の問題、次に説得のメッセージを受け取るとき、信頼性がどう影響するかについての問題、そして、メッセージを送る際に、信頼性が増したり、信頼性を失ったりするプロセスの問題が挙げられる。

具体的には、①社会的、専門的地位や、メッセージの受け手に対して報酬や罰を与える権限といった権力の有無。

②最も効果的に信頼性を作れるかどうか。広告や推薦状の影響。メディアの権力の有無。③公の場での言動、言葉の早さ、可聴性、声の種類、発音、調音（発音の明瞭度）、流暢さなどの要因や、方言。こういった要素・影響・プロセスの中にあるさまざまな要因は、いずれも複合的に絡み合っており、メッセージの送り手の信頼性に影響する。

そこで、メッセージの送り手である藤村をとらえ、フランクリンと比べながら、藤村の童話の根底にある「子供に聞かせたいと思ふこと」を考察したい。

一 藤村とフランクリン——メッセージの送り手の特徴

言うまでもなく、藤村の童話におけるメッセージの送り手は藤村であり、『フランクリン自伝』におけるメッセージの送り手はフランクリンである。そこで、単純に比較できるものではないが、まず、大雑把にフランクリンの経歴をみる。

アメリカがまだイギリスの植民地であった頃、父親の代にアメリカに移住し、ボストンの貧しい蠟燭・石鹼造りの子として、兄弟十男七女の十七人、男子の末子で、下から三番目に生まれ、短い期間しか学校に行くことができず、奉公にだされたフランクリンは、いわゆるアメリカン・ドリームを達成した。それは、27歳の時に発行した「貧しいリチャードの暦」という出版業者としての経済的成功のみならず、31歳から政治に関与し、49歳の時には、植民地ペンシルヴェニア州の代表となり本国イギリスと交渉したり、71歳の時、独立宣言書起草委員に選ばれたりした政治家・外交官であり、また、48歳の時、イギリス学士院からコプリー賞を受け、51歳で、イギリス学士院会員に推されて入会するし、57歳の時、オックスフォード大学より学位を贈られるなどヨーロッパで高く評価された科学者であり、64歳の時には、アメリカ学術協会初代会長に選ばれ、哲学者、経済学者、作家、そして、アメリカ資本主義の育ての親と称される社会的地位・評価を獲得している。

それ故に彼が説く立身出世につながる徳目の信頼度は高く、マーク・トウェイン (Mark Twain, 一八三五年—一九一〇年) は子供たちを啓発するどころか、逆に威圧し、萎縮させる「フランクリンの邪悪な伝記」と称したり (注8)、D・H・ロレンス (D.H.Lawrence, 一八八五年—一九三〇年) は、「僕は道徳的動物である。だが、道徳的機械ではない。」 (注9) と反発する程、後世の子供たちへの影響力には強いものがある。

これに対して、藤村はここまで多彩な評価を受けてはいないが、彼もまた、四男三女の末子で、16歳頃、政治家を志望するが果たせず、20歳で「女学雑誌」の編集を手伝うことになり、早くから出版業にかかわり、翻訳文や小論を載せる。25歳の時、仙台の東北学院に教師として赴任するなど、教師をしていた時期もあり、フランクリンが「貧しいリチャードの暦」を出版したと同じ二〇代半ば、26歳の時、第一詩集『若菜集』を発行し、高い評価を得て、浪漫主義の新体詩詩人の代表格となり、更に35歳の時、『破戒』を自費出版して、自然主義作家として評価を得ることになる。その後、昭和初期に興った円本ブーム以降、作家としての経済的成功を見る。そして、詩人・作家としての領域の中ではあるが、64歳で日本ペンクラブの初代会長に就き、72歳で没するまで務める。

藤村が童話を書きたいと感じたのはフランス滞在中で、帰国後、体験や見聞をもとに、46歳の時の『幼きものに』から書き始める。既に、浪漫主義の新体詩詩人・自然主義作家として評価のあつた彼が、童話を残す必要性を感じ、子供の領域に踏み込む。メッセージの送り手としての信頼性は、やはりフランクリンには及ばないが、その特徴において、二〇代半ばから一流の評価を得、更に新たな興味を実現させる熱意には共通するものがある。

二 藤村童話と『フランクリン自伝』の類似点と相違点

(1) 五部作目未完

藤村の童話について、飛田文雄は『藤村の童話 その位置と系譜』（注10）で次のように指摘する。なお、書名の後の（ ）は、その刊行年とその時の年齢で、富田が記入した。

幼年期の体験を題材とした「ふるさと」(大正9(一九一九)年 49歳)、少年期の体験を題材とした「をさなものがたり」(大正13(一九二三)年 53歳)、青年期の体験を主たる題材とした「力餅」(昭和15(一九三九)年 69歳)、壮年期の体験を題材とした「幼きものに」(大正6(一九一六)年 46歳)と、各年代の体験に題材を求めた童話がありますが、老年期のそれがありませんでした。「インドの坊さん」と「きつねのよめいり」は、まさにそれにあたります。

藤村の人生の壮年期までを、四つに分けた構成で、しかも、時間を置いて書かれ、老年期の体験を題材とした童話の完成はみなかった。

一方、『フランクリン自伝』も、一七七一年八月66歳の時、イングランド南部ハンプシャーのトワイフォード村の親友の屋敷に滞在中に書き始め、この十三年後、一七八四年79歳の時、パリの近郊パシーにて第六章を続稿。更に、四年後、一七八八年83歳の時、フィラデルフィアで第七章から続稿し、中断しながらも、翌年、死の前年まで、四回、十九年間に亘って書き継いでいる。それぞれ第一部から第四部と称される。因みに、第一部は、先祖の逸話と少年時代から、25歳の時、一七三〇年九月のデボラ・リードとの結婚までの生い立ちに類すること、第二部は、一七三一年26歳の時の十三徳樹立の記述、第三部は、その後、「貧しいリチャードの暦」で経済的に成功し、ますます社会的活動に関与を深め、一七五九年54歳の時に『歴史的概観』(*An Historical Review of the Constitution and Government of Pennsylvania*)を発行したことまで、第四部は、52歳の時、一七五七年七月、当時、イギリスの植民地であったアメリカのペンシルヴェニア州会代表としてロンドンに渡った時のことの記述で終わって、残り三〇年余の、アメリカ

カがイギリスの殖民地から独立を達成した、政治家・外交官として最大の貢献をなした時期の記述はない。

どちらも四部構成になっており、老年期にあたる五部作目は未完に終わった。偶然ではあろうが類似する。

(2) 息子へ語りかける文体

藤村童話では、最初に書かれた『幼きものに』（注11）のはしがきに、

父さんが遠い外国へ出掛ける時、二人の子供を東京に残して行きました。その時、兄の太郎は九歳、弟の次郎は七歳でした。……太郎が九歳の時は、三郎は六歳、お末は四歳でした。……太郎はもう十三歳、次郎は十歳でした。

と、語りかけながら、子供たちを紹介し、第一話が、「太郎もお出。次郎もお出。さあ父さんはお前たちの側へ帰ってきましたよ。一つ驢馬のお話をしませう。仏蘭西の方で聞いて来たお話をしませう。」と、語りかけてはじまる。そして、第二作目の『ふるさと』（注12）の第一話も「みんなお出。お話しませう。」、第三作目の『をさなものがたり』（注13）も「太郎よ。お前は今、田舎の方で毎日元氣よく働いて居ますか。」、第四作目の『力餅』（注14）の第一話「皆さん、お出なさい。お話しませう。」と、その語りかけのスタイルは変わらない。

第三作目の『をさなものがたり』のはしがきに、（傍点は、富田による。）

四人の子供も大きくなりました。太郎は今年十九歳、次郎は十七歳になります。……三郎が十六歳にもなります。

一番下の末子ですら最早十四歳ですもの。……わたしの子供等も、今では大きくなりましたが、少年から青年に移りかける年頃のものにも読んで貰うつもりで、わたしはこの本を書きました。わたしの家では、年上のもので、年下のものでも、みんな一緒に集まって、子供らしい話をしたいと思ひます。さういうわたしまで一緒に幼い心に帰りたいと思ひます。

と、「少年から青年に移りかける年頃のものにも読んで貰うつもり」「年上のもので、年下のもので、みんな一緒に集まって、子供らしい話をしたい」「一緒に幼い心に帰りたい」と、成長した子供たちに子供たちへの希望を語って始まる。

一方、『フランクリン自伝』の書き出しは、「一七七二年 トワイフオード在セント・アサフ主教の屋敷にて」と記した後に、「息子よ。」の呼びかけの言葉から始まり、(傍点は、富田による。)

先祖の逸話を集めるのは、どんな小さい逸話でも、昔から私には楽しいことだった。お前も覚えているだろうが、私がお前と一緒にイングランドへ出かけた時、いまなおその地に残っている親類の者について調べたり、旅行したりなどしたのもそのためであった。同じようにお前にとつても、私のこれまでのことを知るのは嬉しいだろう。その多くはお前がまだ知らないことなのだから。……それで、一つお前のために書いてみようと思つて机に向かつたのである。

と、「同じようにお前にとつても、私のこれまでのことを知るのは嬉しいだろう。」「それで一つお前のために書いて

みよう」と、お仕着せがましくもあるが、息子に宛てた手紙の形式で語り始める。

この息子、ウィリアム・フランクリン（一七三一？―一七八八年）は、一七六二年32歳頃、国王任命のニュー・ジャージー植民地総督となり、『フランクリン自伝』第一部の書き始められた頃には、41歳前後で、徳目や教訓を与えられる必要は既になく、世俗的な成功を収めている。彼は、独立戦争（一七七五年―一七七六年）の際には、フランクリンと対立する程、保守的傾向が強かったことや、彼は私生児で、母親は誰であるか明らかにされていないし、彼もまたウィリアム・テンブル・フランクリンという私生児の息子がいたから（注15）、フランクリンの場合も、藤村と同様に、成長した子供に子供への希望を語ったと見ることが出来る。

どちらも息子へ語りかける文体で、自分の人生で体験して感じた真意を伝えようと試みている。

（3） ユーモアと教訓

藤村は「飯倉だより」の「童話」（大正10（一九二一）年6月）（注16）で、（傍点は富田による。）

独逸あたりの新しい童話作家の書くものには随分難解な作があると聞いた。いくつかの蠟燭の火を一つづ、吹き消して行くと、しまひには真暗になった。唯それだけのことを書いたやうな童話もあるとか。あの蠟燭の話はつきりとも今は記憶していないから、違つて居るかも知れないが、しかし何といふことなしに忘れがたい。

童話には理解し得る教訓よりも、感知し得るユーモアを欲しい。

子供に注意を向けることは、やがて私達自身を育てることになる。全く、子供の世界は、一つの大きな秘密だ。

と、述べている。

とはいえ、宮口しづゑが、「馬籠の小学校教師として……。教室で、*「ふるさと」*につづく藤村の童話をよんできかせても、先生、又父さんがねえというやつなら、つまらんぞ」とはつきり拒否された思いもある。」(注17)と、子供らの反応を紹介したように、一方的な思い入れが強い。

一方、フランクリンのユーモアについて、渡辺利雄は、『フランクリンとアメリカ文学』(注18)で、次のように述べる。

ルアークの『アメリカのユーモア——国民性の研究』……によると、アメリカのユーモアには、北部のヤンキー、西部の開拓者、南部の黒人の三つの系統があり、……共通する特徴として、古い絆を断ち切った放浪生活、新しい環境への適応力、庶民的な言語感覚、語り口における誇張、仮面の使用などの特徴、傾向、つまりアメリカ人がほとんど無意識のうちに身につけている性格を指摘し……。フランクリンは、時代が時代だけに、南部の黒人のユーモアとは縁がなかったが、ルアークの指摘するアメリカのユーモアのあとの二つの特徴をいち早く示していた。(二二六頁―二二七頁)

フランクリンは、英国政府を挑発し、植民地住民を奮起させるために、独立革命前夜、……一連の風刺文を書いたのだ。そして、意表をつく発想法、ユーモアで、おそらく正攻法の弾劾文以上の効果をあげている。……ユーモ

アは必ずしもそうした攻撃用の武器としてのみ機能するわけではない。のちにアメリカのユーモアを代表することになったマーク・トウェインは、「ユーモアは真実の気立てのやさしい側面だ」と述べたことがあるが、ユーモアの存在によって、人生あるいは文学がどれだけ親しみやすいものになっているか、あらためて言うまでもないだろう。フランクリンは、実際の生活においても、著作においても、たくまざる、人間味豊かなユーモアの才を発揮した。(二五四頁)

つまり、フランクリンのユーモアのセンスには定評がある。また、『世界大百科事典』『フランクリン・B』(注19)の項には、次のように載る。

彼の著作は、《貧しいリチャードの暦》や《自叙伝》にも示されるように、だれにも読める平易な文章でつづられ、一見通俗的な道学者流の教訓が述べられている。しかし、その基底にあるものは、独立、自由、機会、勤労、成功といった、宗教改革を源泉とし、啓蒙主義を経て脱宗教化したピューリタニズムの基本的価値であった。フランクリンは、まさに M・ウェバーのいうように「近代的人間類型」の古典的見本であり、「資本主義の精神」の体現者であったといえよう。彼は代表的アメリカ人であるとともに、また代表的近代人でもあったのである。

藤村の「感知し得るユウモア」とは、何か、フランクリンほどはつきりしないが、何といふことなしに忘れがたい」といった効果を狙い、だれにも読める平易な文章で、しかも教訓的になりがちな童話という表現方法によって、「子供の世界」という「一つの大きな秘密」を鏡にして、人間味豊かに人生あるいは文学の親しみを表現し伝

えたいという気持ちで汲み取れる。

さて、フランクリンは、『フランクリン自伝』よりも、十四年前、一七五七年、当時、ロンドンに滞在して植民地の自由の獲得のために、領主と交渉をする状況にあった51歳の時に、一般読者に向けて、だれにも読める平易な文章でつづられ、一見通俗的な道学者流の教訓を連ねた「富に至る道」(Benjamin Franklin, *The Way to Wealth*, 1757) (注20)を出版した。

それには、「当節の世の中をどうお考えになります?…一体どうすれば、この高い税金を払って行くことができます。…しょう。」(二七四頁)という問いかけに対して、「今日わたしたちは、たいへんな重税を課せられております。…人によっては、政府が課している税金とは比べものにならないほど重い税金を背負っておるのです。…怠惰…虚栄心…愚か…。」(二七五頁)と、実際の重税以上に、〈怠惰・虚栄心・愚か〉は生活に苦勞する原因であり、「神は自ら助くる者を助く」(二七五頁)のだから、「人生を大切に思うと言われるのか。それならば、時間をむだ使いなさらぬがよろしい。時間こそ、人生を形作る材料なのだから」(二七六頁)と、万人平等にある〈時間〉に着目する。

そして、それら〈怠惰・虚栄心・愚か〉を遠ざけて、〈時間〉を大切に心がけ、「ものぐさは万事を難くし、勤勉は万事を容易にす。」(二七六頁)、「仕事を追い立てよ。仕事に追い立てられるな」(二七七頁)、「骨折りなきところに利得なし」(二七七頁)、「土地を持たぬとあらば、おのが手足に助けを借りよ」(二七七頁)、「買う必要もないものを買ったら最後、やがてそのうちに、なくてはならないものまで売り払わねばならぬことになる」(二八三頁)、「賢い者は他人の災いで悟り、愚かな者は自らの災いによっても目がさめぬ」(二八四頁)と、平易な文章で、諺や格言を取り込みながら、はつきりと〈勤勉・節約・慎重〉につとめるように説く。

そして、「借り手は貸し主の奴隷、債権者は債務者の主人」である(二八九頁)から、「勤勉の徳によって自由を、

節儉の徳によつて自由を享受されることです。」(二八九頁)と、〈自由〉の価値を強調する。そして、「得られるものは得よ、得たものは手放すな。これぞ鉛を黄金に変え得る石」(二八九頁)と、手に入れた〈自由〉を保持し享受し続けるようにと説く。

更に、フランクリンは、老紳士エイブラハムに、「心をつつましく保つて神の祝福を求める一方、現在、神のみ恵みにあずかっていないと思える人々にたいして、無慈悲な態度に出ることなく、これを力づけ、助けてあげるように心がけて下さい。」(二九〇頁)と語らせている。

藤村の童話には、これほどはつきりと教訓を並べたてたものはない。

藤村は、フランクリンの生きた時代とは、時代も環境も違つて、『力餅』の最初の話、第一章一「時計の話」は、ヘス・ビード時代」の到来を話題にして、『さうみんな同じやうに動いたら、何も動かないやうに見えますよ。……静かに立つてゐるものがあればこそ、他のものの速いか遅いかもはつきり分りますよ。……わたしは急ぎもしなければ、休みもしません。……生徒さん、どんなスピード時代が来ても、時計はこれでいゝと思ひますよ。』の話ではじまるやうに、時間に対する語り方も違ふ。メッセージの送り手の特徴が、その人が心の中で経験していることを記号で表そうとする際に大きな影響を及ぼすから、藤村とフランクリンの語り方の違いとしてあらわれる。つまり、フランクリンの方が、藤村よりも教訓を強く意図して語ろうとしたのである。

ところで、実際のフランクリンについて、A・O・オールドリッジが「ベンジャミン・フランクリンの『自叙伝』」(Alfred Owen Aldridge, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, 1976) (注21)で、次のように紹介する。

フランクリンが、自分の決意した十三の徳を論じている部分を「回想録」で書いていた時、それぞれの徳につい

て完全な得点を得るのは、彼にとって不可能であるばかりか、望ましくもなかったというのが、まさしく本音であろう。なんとすれば、この同じ年の一七八四年に、自分の娘に向かって、完全無欠であることは、「道徳上の一種の見栄」であろうとか、「完全な人格というものは、人にそねまれ、憎まれるという面倒なことにつきまとわれるかもしれない」と、打ち明けている。

フランクリンは自分の決意した十三の徳を論じながらも、メンタルトレーニングを心がけたへ見せたい自分の演出を自覚している。

やはり、藤村とフランクリンの生きた時代は、時代も環境も違うから、発信するメッセージにはかなり異質な要素があり、語り手の演出されるものは違うが、ユーモアと教訓を関わらせながら、子供たちに自分自身の存在をつたえたいという感情が共通して窺える。

まとめ

藤村とフランクリンは、生まれた国も、生きた時代も、果たした役割も違うし、メッセージの送り手としての信頼性は、やはり藤村はフランクリンには及ばない。しかし、その特徴において、二〇代半ばから一流の評価を得た後も、満足することなく、更に新たな興味を実現させる熱意には共通するものがある。

そして、藤村童話四作も『フランクリン自伝』も、一時期にまとめて書かれたものではなく四期、二〇年前後にわたって熱意の衰えることなく書かれ、五期目は書かれることなく、自己の壮年期までの体験をもとに、四期に分けた

形で存在し、いずれも子供に語りかける口調で語る。そして、示した教訓の度合は違うものの、ユーモアを基調に子供に自分自身の存在を伝えようと試みる点が共通する。

フランクリンが、十三の徳の決意によってメンタルトレーニングを心がけた〈見せたい自分〉を演出したように、藤村の童話の根底にある「子供に聞かせたいと思ふこと」は、ユーモアを基調に子供に演出した自分自身の存在を伝えることである。つまり、既に浪漫主義の新体詩詩人・自然主義作家として、青年の苦悩を描いて、自我のアイデンティティ（同一性）の確立を表現したように、現存の世界を不完全なものとし、疎外からの救済を求めて、幼年期からの自己の体験をユーモアで演出して描き、子供にも感じてもらえる自我のアイデンティティの確立、自分自身の存在を伝えたいのである。

（平成十二年十月）

注

- (1) 『幼きものに』大6（一九一六）・『ふるさと』大9（一九一九）・『をきなものがたり』大13（一九二三）・『力餅』昭15（一九三九）の四作。『眼鏡』大2を含め、五作とする場合もある。（飛田文雄『藤村の童話 その位置と系譜』双文社出版 昭58年4月四九頁 参照。）
- (2) 『世界大百科事典』第2版ベシック版 Windows98/95/NT版 CD-ROM版 平凡社 一九九八 Hitachi Digital Heibonsha. All rights reserved 斎藤真担当「フランクリン・B」の項。
- (3) ベンジャミン・フランクリン著 松本慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』岩波文庫 岩波書店 一九五七年一月第1刷・二〇〇〇年二月第60刷を参照する。以後、引用する時は、これによった。引用文後の（ ）内の数字は該当頁。
- (4) 注3と同書。三二六頁。西川正身「フランクリン自伝の周辺」

- (5) 注3の書籍掲載の「フランクリン年表」では、満年齢で記載するが、ここでは、藤村の記載に合わせて、数え年で記載する。
- (6) A・O・オールドリッジ著 秋山正幸・安部享子共訳『ベンジャミン・フランクリンの「自叙伝」』(Alfred Owen Aldridge, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, 1976) (秋山正幸編訳『比較文学—日本と西洋』南雲堂 一九七九年三月一刷・一九八八年十月三刷 所収) 九四頁
- 因みに、「金剛石」の歌詞の一番を、堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(岩波文庫 岩波書店 昭33年第1刷、昭49年第20刷) 四八頁より、引用する。
- 一金剛石もみがかずば、たまの光は そわざらん。ひともし、学びて 後にこそ、まことの徳は あらわるれ。
時計のはりは たえまなく めぐるがごとく、ときのまも、光陰惜みて はげみなば、いかなる業かならざらん。
- (7) ガウラン・S・デニス・西田司編著『文化とコミュニケーション』第3章パブリックコミュニケーション」八朔社 一九九六年四月第1刷 五五頁
- (8) 渡辺利雄『フランクリンとアメリカ文学』研究社選書11 研究社出版 昭55年4月 五四頁
- (9) 野崎孝訳『アメリカ古典文学研究』(D.H.Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, 1923) D・H・ロレンス紀行・評論選集4 南雲堂 昭62年6月「第二章 ベンジャミン・フランクリン」四五頁
- (10) 双文社出版 昭58年4月 三三頁
- (11) 『藤村全集』第八卷 筑摩書房 昭42年6月 四四七頁
- (12) 『藤村全集』第九卷 筑摩書房 昭42年7月 二七五頁
- (13) 注12と同書。三五七頁
- (14) 『藤村全集』第十卷 筑摩書房 昭42年8月 四〇二頁
- (15) 注8と同書。二七頁
- (16) 注12と同書。一〇七頁
- (17) 注12と同書。付録『藤村全集』月報11 六頁
- (18) 注8と同書。「」内の頁数は、該当頁数。
- (19) 注2と同書。

(20) 注3と同書。付録 二七三頁～二九一頁

(21) A・O・オールドリッジ著 秋山正幸・安部享子共訳『ベンジャミン・フランクリンの『自叙伝』』(Alfred Owen Aldridge, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, 1976) 秋山正幸編訳『比較文学—日本と西洋』南雲堂 一九七九年三月1刷・一九八八年十月3刷 所収 二二一頁

付記

この課題に対し、梶山女学園より平成12年度学園研究費助成金(B)をいただきました。